

# 草創期の新聞ジャーナリズムと錦絵

— 西南戦争を事例として —

Nishikie (The Colour Woodblock Print) and Newspapers in Early-Meiji Japan:  
Pictorial Journalism in the Case of The Final Civil War  
(The Satsuma Rebellion) in 1877

長谷川 倫 子

目次：

はじめに

1. なぜ西南戦争とメディアなのか？
2. 錦絵と西南戦争
3. 錦絵と西郷隆盛

おわりに

参考資料

はじめに

本論では明治時代初頭に焦点をあて、メディアによってニュースが伝えられることでのいかなる情報空間が作り出されていくのかを考察する。明治時代は新聞が日本の各地で産声を上げていた時期でもあり、当時のメディアの中で、「錦絵」(Nishikie)<sup>1)</sup>と呼ばれていた浮世絵の一形式である画面全体に多色刷りを行い市販されていた木版画が、新聞との関係性においていかなる立ち位置にあったのかについて考えることを意図している。錦絵は主に芸術として研究されてきたが、ジャーナリズムの観点からいかなる役割を果たしていたのか、その事例として着目したのが、近代史における日本最後の内乱と言われている1877(明治10)年の西南戦争(The War of the Southwest=The Satsuma Rebellion)である。明治初期のこの出来事をめぐって、江戸時代から続いた技法により庶民に楽しまれてきた木版芸術である錦絵と、草創期にあった新聞がいかなる状況にあったかの考察を試みるものである。

識字率の上昇による読者層の形成、ニュースへの対価をいとわない中間層の拡大、活版印刷と流通システムから構成されたビジネスモデルの確立、言論機関にとどまらず娯楽や生活情報提供者としての役割の獲得等、明治時代以降、活字メディアとして日本の新しい情報環境を牽引することになる新聞の出現と、その産業化を可能にした社会的な要因をみると、新聞は近代化の賜物であると実感する。

日本における新聞の発展を支える情報インフラの整備が開始されるのは明治初期からのことであるが、この時代にはまだ江戸時代からの伝統的な製法を踏襲した錦絵が大量に販売されており、視覚メディアとして、当時の活字メディアの印刷技術のレベルではカバーできなかった世の中の出来事の補足説明を行う役割を錦絵は果たしていた。日本が近代化をとげるとともに新聞が売上高を伸ばしながら、ニュースの提供だけでなく社会のあるべき方向性を示すことで世論形成に寄与するという新しいコミュニケーションのスタイルが次第に定着していくなかで、江戸時代に開花した町人文化の代表ともいべき当時の錦絵は、いわば文明開花の寵児でもあった新聞の普及にいかなる役割を果たしたのだろうかという疑問も本論でこのテーマを選んだ理由である。

幕末から明治時代にかけての新聞が日本社会における立ち位置を獲得していく流れを下支えした情報インフラやその普及を後押しした社会的な要因としてまず思い浮かぶのは、新聞読者層形成の前提となる識字率向上に最も寄与した明治政府による1872（明治5）年8月2日の学制の交付であろう。身分やジェンダーに関係なくあまねく国民に与えられた義務教育制度による読み書き能力獲得の機会は、新聞を読むことでニュースや新しい知識を得ることが出来る読者層の拡大に寄与しただけでなく、新聞を通じた情報伝達を可能ならしめるという、為政者にとっても有益な帝国日本における上下下達のためのコミュニケーション装置としての新聞によって、識字能力を備えた臣民がトップダウンの指示を受け入れるという前提条件の一つが充足されたことも意味していた。

1869（明治2）年に東京と横浜間で電信による情報伝達が可能になったのに続き、1872（明治5）年は国民全体のライフスタイルまでも大きく変えた鉄道が新橋と横浜間で開通し、1871（明治4）年にスタートしたばかりの郵便事業とともに、新聞という当時のニューメディアがさらに躍進を遂げていくという流れの土壌が形成された。このように日本社会全体が近代化を遂げつつあった明治時代初期における最後の内乱（civil war）ともいわれている1877（明治10）年の西南戦争であるが、本研究は、写真誕生前夜ともいえるこの時期に視覚メディアによる報道の役割も果たしていたとされている当時の錦絵の考察を試みるものである。

## 第1章 なぜ西南戦争とメディアなのか？

明治十年：一月、西南の役が起こった。しかしそれに呼応して、各地に乱の起るものではなく、東京に於いても、市民の生活は平穏に営まれていた。九月、叛軍の将西郷隆盛は自刀し、ここに戦乱は平定した。しかしこれが明治年間における、最後にしてまた最大の内乱となった。（森銑三【1982】46頁）

メディアを駆使した情報戦となった西南戦争において、言論機関でもある新聞は看過しがたい媒体であると認識されていた。その戦況報道はその後の作戦遂行にも大きな影響を与えかねないこともあり、開戦にあたって政府側は、まずは情報を隠蔽するという姿勢に加えて、新聞に対しては徹底した情報統制を行うことを旨とした。それを示しているのが、2月19日に出された以下のような記事取り締まりの布告である：

今般鹿児島県下暴徒被仰出候ニ付テハ右ニ関シタル無限ノ伝説等妄ニ新聞紙ニ掲載不相成候比旨布告候事 右大臣岩倉具視（朝日新聞社編【1930】91頁）

さらに5月には戦争報道の記事を事前に届け出るよう義務付ける「戦報に関する事件を新聞紙に登録せんとするときは必ず調書を経るものとする」という記事取り締まり令を追加することで、政府側に不利になるような記事を掲載した新聞には刑罰をもって対処するという徹底した姿勢が示された。それに呼応するかのよう新聞各社の論説や社説には、反乱を企てた「鹿児島の暴徒」たちは、「人民の公敵」であり、「国家の凶賊」といったような表現があふれるようになった。明治時代という新しい日本への扉を開けた英雄、文明開化への疑いや新体制への不満の代弁者としての西郷隆盛はどこかに消え去り、叛逆を企てた国賊としての西郷という表現のみが新聞には登場するようになった。

西南戦争とメディアとの関係性に着目した研究の嚆矢は、有山による一連の研究（①2019年2月、②2019年3月、③2019年9月、④2020年9月）であるが、有山は新聞記事などのテキストを通じて西南戦争によって形成されたメディア空間の包括的な分析を行っている。有山の関心は、新聞メディアを中心とした西南戦争の戦況レポートがさらに人びとを通じて流布されるさまから、明治初期の日本でいかなる情報空間が創出されていったのかを解明することにあつた。これらの研究を通じて有山が提示したのは、西南戦争において活字メディアを中心にそれを取り巻く情報インフラによって重層的なメディア空間が創出されたというものであり、それらは（1）徹底した報道統制によって、征討の正当性を唱える政府軍側に寄り添い、薩摩軍を国家への叛逆を企てるものとした新聞の社説・論説による情報空間、（2）戦況が好転すると戦闘開始時の制限から一転して検閲を解除し、電信による雑報や電報による現地からの断片的な戦況レポートが大量に新聞に掲載されることで蓄積されていった情報空間、（3）新聞の論説やストレートニュースの補足説明を行った小新聞や絵入り新聞の提供した情報空間の三つから構成されていたというものである。

有山はさらに、錦絵などによる視覚情報がその補足を行い、その結果として日常的に交換しあう風聞・浮説が情報空間に加わることになったとしている。言い換えるならば、有山の提唱したメディアによる情報空間は、これらのすべての要素がまじりあうことで創出された情報空間—西南戦争をめぐる想像の共同体—が、開戦をきっかけとして明治初期の日本で創

出されたことを示唆するものである。

おおよそ7か月にわたって繰り上げられたこの戦いはまた、草創期にあった日本の新聞界に大きな足跡を残した。以下ではその主なものをそれぞれの項目ごとに見ていこう。

#### 〈新聞の躍進〉

当時の日本社会における最大の関心事となった西南戦争が日本の新聞界に多大なる経済的恩恵をもたらしたことを示すものとして、1931（昭和6）年に出版された『明治大正史1 言論編』に残されている記述の中には、「西郷起つの報によって、何れもその戦報を聞かんとして争って新聞紙を購入したので、言論機関の著しき発達を促した<sup>2)</sup>」という記述がある。熊本や鹿児島における政府軍と薩摩軍のせめぎあいの進捗状況を伝える新聞への関心が高まることで、新聞がおしなべてその部数を伸ばした点については、日本新聞販売協会の『新聞販売百年史』（1971）においても、「国民の関心が西郷の拳兵に集中して、その戦況を知るために人びとは競って新聞を講読した」とされている<sup>3)</sup>。また岡島新聞舗の『大阪の新聞』（1936）には、「新聞の繁盛」という見出しとともに、この戦争によって大阪の新聞界も予期せぬ活況に沸いた様子が以下のように記されている：

東京および大阪の新聞は紙数が増加して、従来千をもって数えられていたものが、萬をもって数えられるようになり、経営に困難していた新聞社も戦争のために回生したのもあった。（岡島新聞舗【1936】53頁）

さらに上述の百年史には、西南戦争によって政治の中心が京都に移ったことで、京阪地域においても新聞が創刊したことも記されている。それらの新聞を列挙すると、京都では日刊・週刊紙である【西京新聞】、【平安新聞】、【京都日日新聞】、【蜻洲新報】等が創刊されたとある<sup>4)</sup>。

また官軍の策源地として同年の3月まで内閣行署（内閣出張所）がおかれた大阪でも新聞の創刊ラッシュは続いた。それらは【大阪記事新報】（4月）、【大阪絵入り新聞】（5月）、【浪花実生新聞】（7月）【大阪新聞】（5月）などで、それまでの有力紙であった【大阪日報】（大新聞）や【浪花新聞】（小新聞）にこれらが加わることになった。さらに翌年の12月23日には大阪地区における東京日日の発売元から【大阪でっち新聞】が発刊された<sup>5)</sup>。

すなわち、京阪地区にとっての西南戦争は、後には全国制覇を果たすことになる「朝日」「毎日」等の大新聞を大企業へと躍進させるまでになった新聞大国大阪の黎明期に影響を与えた出来事となり、ここから多様な新聞が切磋琢磨する関西新聞界の土壌が形成され、ひいては日本人と新聞の関係の方向付けの出発点となった可能性も考えられるのである。

### 〈新聞記者による戦況報道の誕生〉

日本初の従軍記者は台湾出兵の際に現地からの報告を行った【もしほ草】の岸田吟香と言われているが、岸田の戦況報告活動は新聞社からの派遣ではなく、大倉組の手代としての渡航によるものであり、厳密に言うと、新聞社に所属する記者が戦況報告のために戦地に赴き、現地取材にもとづいたレポートを行ったのはこの西南戦争からであった。

朝日新聞社編の『明治大正史1 言論編』(1930)によると、【東京日日新聞】からは、福地源一郎、久保田貫一、南(難)波正康の3名、【郵便報知新聞】からは矢野文雄、犬養毅の2名、【朝野新聞】からは成島柳北、【読売新聞】からは饗庭篁村それぞれ1名が派遣されたとある<sup>6)</sup>。

その従軍記者による記事の中で最も際立っていたのは東京日日の福地源一郎による戦況報告であったが、当時すでに御用新聞としての立ち位置にあった東京日日の福地は正式な従軍記者としての現地入りは容認されず、山縣有朋の記室(軍事記録方)として同行することが許可されたものであった。民間レベルで現地への移動を可能にする交通手段すらなかった状況下では各新聞社が記者を派遣するのは不可能な状態でもあり、当時福地の行った戦況レポートは山縣の黙認によってかろうじて実現したものであったとある。

### 〈フォト・ジャーナリズムの萌芽〉

活字メディアが中心であった西南戦争の報道であったが、フォト・ジャーナリズムへの橋渡しともいえる記録としての写真撮影が、この争乱において初めて行われたのも特筆に値するだろう。湿板撮影であったため、戦闘を直接レンズにおさめることは叶わなかったものの、207枚にも及ぶ激戦をしのばせる戦場写真が残されている<sup>7)</sup>。

日本における写真の開祖とされている上野彦馬は、政府軍征討参軍川村純義の命を受けた長崎県令北島秀朝から戦場の写真記録を依頼された。日本初の従軍写真家となった上野に付き添った助手は、野口丈一、薛(せつ)信一の2名で、写真機、携帯暗室、器具一式を運ぶ人足8名を引き連れて、田原坂、吉次峠等の激戦地の跡を撮影し、そこで何がおきていたかを伝えてくれる惨事の記録を残している。

## 第2章 錦絵と西南戦争

当時の錦絵は、あくまで市井の人びとのための商業印刷物の一つに過ぎなかった。来日した外国人や万国博覧会などで海外に渡った浮世絵に魅せられた海外のファンたちにその審美眼から美術品としての価値を発見されるまでの錦絵や浮世絵は、下町の庶民に愛好されるポピュラーカルチャーとして位置づけることが出来るだろう。

また錦絵は、都市に形成された手工業者のネットワークによる協同製作によって作り出さ

図表 1 西南戦争を描いた主な絵師たち

氏名	師事	生没年	他の画号
揚州周延（ようしゅう ちかのぶ）	国芳・国定	1838（天保9）～1912（明治44）	芳鶴
月岡芳年（つきおか よしとし）	国芳	1839（天保10）～1892（明治25）	大蘇
歌川芳虎（うたがわ よしとら）	国芳	不明	孟斎
山崎年信（やまざき としのぶ） 田口年信（たぐち としのぶ）	芳年	1857（安政4）～1886（明治19） 1866（慶応2）～1903（明治36）	
落合芳幾（おちあい よしいく）	国芳	1834（天保5）～1902（明治35）	歌川

出典：樋口弘『幕末明治の浮世絵集成』（味燈書屋、1955年）85-94頁

れていたもので、店頭に並び販売されるまで独自の流通システムで管理されていた。その統括をおこなっていたのは「絵草紙屋（地本錦絵問屋）」であり、絵師によって作成された下絵をもとに彫師が木版を作成し、次の工程では摺師が刷り上げていくという共同作業によるものであった。また基本的には届出制度下にあったものの、前述したような西南戦争開始直後に新聞に対して課せられたほどの統制はなく、製作者たちには、題材選びにおいても自由に自らの発想と表現スタイルでその才能を遺憾なく発揮することが可能であった。

西南戦争の物語を錦絵に残した絵師たちの作品が最も多く所収されている熊本市立博物館の作品リストを参考に、当時の絵師たちを見てみよう（渡辺【1977】）。同博物館に収蔵されている西南戦争が描かれた錦絵は3枚1組のセットが110点で合計330枚となっている。その一覧をまとめた渡辺（1977）による報告書の巻末のリストの中で上位にランクされているのは揚州周延で、その作品数は33点と他を圧倒しており、月岡芳年の18作品、孟斎（歌川芳虎）の15作品、年信（山崎又は田口）の14作品が続いている<sup>8)</sup>。これらの代表的な絵師たちに、錦絵新聞で活躍した落合芳幾を加えて表にしたのが図表1である。

以下ではジャーナリズム的な役割をはたしていた錦絵を、二つの視点から考察する。まずは新聞の創成期に登場した錦絵新聞の視点からである。もう一方のアプローチは、市井に流通していた錦絵そのものが、ニュースの伝達者としての役割を果たしていたのではないかという視点である。

#### 〈錦絵新聞（Blocade picture newspaper）としての貢献〉

浮世絵版画の商品性とジャーナリズム性が融合した錦絵新聞は1874（明治7）年から1881（明治14）年までの間に東京、大阪などの都市部で発行され流通していたものである。当時の大新聞の新聞記事が漢文調であったこともあり、錦絵新聞は文字の読めない層の人たちを想定し、新聞に掲載されていたトピックを題材としてとりあげ、A4サイズ1枚の木版画にそのニュース・ストーリーを図式化することで、ニュースの概要をわかりやすく伝えよう



図表 2 錦絵新聞—東京日日新聞第一号  
 明治 7 年 10 月 (元記事明治 5 年 2 月 21 日:旧暦)  
 絵師:落合芳幾, 彫師:渡辺英蔵, 版元:具足屋・嘉兵衛

とした巷の商業印刷物であった。

東京で錦絵新聞が最初に登場したのは 1874 (明治 7) 年 10 月に落合芳幾が、人形町の具足屋福田熊次郎店から売り出したものが初めてとされている (樋口【1955】64 頁)。錦絵新聞の題材となった主な新聞は、1872 (明治 5) 年 2 月に創刊した【東京日日新聞】と同年の 6 月に創刊した【郵便報知新聞】で、両紙に掲載された記事を題材にしたものが数多く確認されている<sup>9)</sup>。図表 2 はその一例である。

錦絵新聞研究の嚆矢は原秀成の「新聞錦絵と錦絵新聞—その出版状況と構造の変化」である。原 (1990) は 1876 (明治 8) 年ごろに大阪で登場した錦絵新聞に着目し、網羅的な分析によって、その歴史的な価値を検閲との関係を中心に分析している。また、大阪を中心に発行された錦絵新聞を網羅的に紹介している土屋 (1995) の研究も先駆的な研究と言えるだろう。

津金澤 (2001) は大阪の錦絵新聞について、明治初期に娯楽・雑報紙として登場する「小新聞」に先駆けたイエロー・ジャーナリズムの役割を果たしただけでなく、実際に錦絵新聞で活躍した浮世絵師たちが小新聞でも活躍していたという点から、錦絵新聞が本格的な新聞登場までの橋渡しの役割を果たした点を指摘している<sup>10)</sup>。

このような錦絵新聞が市場に流通していたのは樋口 (1995) によれば、1881 (明治 14) 年までで、7 年ほどでその姿を消していったという。またその理由として樋口が指摘しているのは、小新聞の登場と識字率の上昇の相乗効果によってもたらされた読者層の変化である。学校制度の開始から 10 年もたつと、その成果が次第に表れるようになり、読み書き能力を備えた人びとの層も広がりを見せた。また、そのような読者層に向けて庶民の関心事をわかりやすくフリガナ付きの記事で紹介した多くの小新聞が都市部だけでなく地方にも購読者を

獲得していくようになり、新聞錦絵はその社会的役割を終えることになった。

#### 〈ニュース媒体としての錦絵〉

戦局を伝えるニュースの流れは、まず知識層のものたちが新聞を通じて情報を入手し、その情報が口承によって流布されていくというスタイルが中心であった。伝聞によって拡散された情報の流れの源となった新聞の情報はフィルターがかけられた結果として残されたトピックが記事になったものであり、さらにそれらの記事は難解な漢文調で書かれていた。さらにここで多用された電信による断片的な情報の羅列から、熊本や鹿児島への地理にも通じていないような一般人が戦況を把握し、ニュースを理解させることには無理があった。そこで戦局に多大な関心を持った人びとの欲求にこたえた視覚情報がまさに錦絵であった。かわら版という地域メディアへの馴染みもあり、それまでにも人びとの注目を集める出来事や事件が起きるとそれを題材にした作品が大量に製作され庶民が購入しやすい価格で販売されていた。一般人にとっても入手が容易であっただけでなく江戸時代から続く伝統的な表現方法の完成度も相まって、錦絵にシンボリックに描かれた戦闘シーンやそこで活躍する中心的な人物の姿は伝聞による情報を入びとが再確認するうえで役に立ったことだろう。

また、当時絵師が現地に派遣されたという記録は現時点においては残されていない。戦地の実態を知る機会などなかった当時の錦絵の製作者たちは、報道管制という政府側の制約を通り抜けて掲載されていた新聞の二次的な情報をよりどころに、風聞にアンテナを張ることで一般庶民の空気 (sentiment) も感じ取りながら、購入意欲をそそるようなコンテンツを伝統的な手法でこぞって製作し、そのようなステレオタイプ化された木版画が、結果としてニュース・ストーリーとなって流布されることで人びとの記憶の一部に新たな戦況として加わることとなった。このように、ジャーナリズムに類似するものとしても機能していた幕末から明治にかけての錦絵は、伝聞や風説に依存せざる負えなかった一般庶民の想像力の中で物語としてのイメージ形成に貢献したのではないだろうか。

以下にあるように、明治初期に来日したアメリカの生物学者モース (E. S. Morse) が、東京で見聞きした事物を書き残した日記には、西南戦争を描いた錦絵の東京での人気を示す記述が残されている：

往來を通行していると、戦争画で色とりどりの絵画店の前に、人がたかっているのに気が付く。薩摩の反逆が画家に画題を与えている。絵は赤と黒とで色も鮮やかに、士官は最も芝居がかった態度をしており、「血なまぐさい戦争」が、我々の目からは怪奇だが、事実描写されている。(モース 【2019】 131 頁)

当時のモースは大森貝塚を発見したばかりでもあり、日本における考古学の発展に多大な



足跡を残したモースの記録した市井の人びとの日常生活に関する記述は、当時の錦絵がニュースを絵にして見せるという視覚に訴える印刷物だけにとどまらず、ジャーナリズム的な役割をも果たしていた可能性をも示唆している。またモースがここで指摘している「鮮やかな色」は、開国によって入手が可能になった海外の染料によるものである。

### 第3章 錦絵と西郷隆盛

西南戦争の終結後以降の日本で、武力行使によって政府に対して異議申し立てを行うものは二度と現れなかった。その報道において明治政府の代弁者の役割も担った新聞は、西郷隆盛を「人民の公敵」、「国家の凶賊」として早期征討論を展開したにもかかわらず、戦争が終結したのちにおいても西郷の人気は一向に衰えを見せることはなかった。

小西（1977）によれば、西郷や西南戦争を描いた錦絵はほぼ500点にも上り、その数は日清戦争時に発売されていた錦絵の数をしのぐものであるという。またその題材の中でも突出しているのは西郷隆盛を描いたものであり、錦絵で描かれている西郷の姿はバリエーションに富んでいる。いわば、西郷隆盛の人気が錦絵の販売を促進し、業者たちはその人気にあやかって西郷隆盛を描いたさらなる作品が製作されていったことが推察できる。

有山（2021, 96頁）は、当時のメディア情報空間では、小さな風聞記事がふくらみ、新聞・実録・錦絵とメディアを変換する過程で、それぞれのメディア特性によって虚構への方向性が増進され、ステレオタイプ化された画像が消費されていったとしている。錦絵に残された西郷隆盛の肖像こそ、まさにこれを具現化している事例であると言えるだろう。

実際のところ西郷隆盛がどのような顔立ちと容姿であったかを知る手がかりとなる写真は存在していない。西南戦争の時代が写真メディアそのものの黎明期でもあったことから、西郷隆盛がレンズに収まった写真がどこかに残されているのではあるまいかと、これまでに様ざまな古写真をめぐる議論が繰り返されているものの、西郷隆盛のポートレート写真は現



図表3 錦絵に描かれた西郷隆盛

存しないというのが現時点では定説になっている（小沢【1986】128-133頁）。

図表3は、当時の錦絵に描かれた西郷隆盛の一例である。

前掲のモースが記した錦絵を買い求める東京の人びとを描いた日記は、遠く離れた熊本や鹿児島で繰り返されている争乱とは無縁でありながら、庶民たちの間で西郷が人気を得ていたことを教えてくれる。新しい日本を目指した明治維新の立役者のひとりでありながら政権から離脱し、最後の内乱と言われる西南の役では非業の死を迎えることになった西郷隆盛が当時の庶民の心をつかんでいることを感じ取ったモースは以下のように綴っている：

一枚の絵は空にかかる星（遊星火星）を示し、その中心に西郷将軍がいる。将軍は反徒の大将であるが、日本人はみな彼を敬愛している。鹿児島が占領された後、彼並びに他の士官達はハラキリをした。昨今、一方ならず光り輝く火星の中に彼がいると信じる者は多い。（モース 前掲書 131頁）

その一つが、モースが上述しているように、「西郷星」の風説である<sup>11)</sup>。これはこの年に火星が接近していたこととも関係している。まだほとんどの日本人が蠟燭と行燈に頼る日常生活を送っていたこともあり、夜空に現れた火星と戦禍で命を落とした悲劇の英雄西郷を重なり合わせることで、西郷が星になったのではというエピソードに共感が集まったのだろう。この西郷星を描いた錦絵も確認されている。

さらに、西郷隆盛の生存説も流布していたようである。西南戦争の十年後にロシア皇太子が訪日するが、西郷と一緒に帰朝するという噂が流れたという記録が残されている。その噂の内容は、西南戦争当時、戦局に見切りをつけた西郷は桐野、村田を従えてロシアの軍艦に潜伏し、その後シベリアに渡ったというもので、ロシア皇太子の来日に随行して帰国するというものであった<sup>12)</sup>。

肖像画や写真の残されていない西郷隆盛をめぐるのは繰り返し偽写真が登場し、話題に上って来たように、西郷隆盛のイメージ形成と西郷の神話がどのようにその後語り継がれて行ったのかについてはこれからも検証を重ねる必要がある。

## おわりに

本論のテーマである西南戦争とメディアの関係性についての議論が始まったのは2019年3月30日に開催された第293回メディア史研究会における有山の研究発表（③2019）からである。錦絵や錦絵新聞、浮世絵、明治初期の新聞の研究に関しては、これまでも数多くの研究成果が発表されてきている。また、海外でも日本の浮世絵や錦絵の研究は、その人気に加え、明治時代以降に海外に流出した浮世絵や錦絵のコレクションをもとに、欧米人研究

者たちによって多くの研究成果が出されている。しかしながら海外の研究は江戸時代の作品に焦点をあてたものが多く、また美学や芸術史研究からのアプローチがその中心となっている。これらの点からも、西南戦争におけるジャーナリズムとしての錦絵研究は、このメディア史研究会から始まったと言っても過言ではない。

また、この有山の一連の研究成果を出発点として、明治初期の情報メディア空間がどのように形成されたかを検証しながら、それ以降の日本のマス・メディアやマス・コミュニケーションの発展の源としての考察を試みることに価値を見出したことも研究に着手した理由の一つであったが、その後実際に当時の錦絵を古書店で発見したこともこの研究に着手するきっかけとなった。

明治維新を成し遂げたばかりの日本で起きた西南戦争は、近代化を目指した日本における最後の内戦となったが、それは新聞の黎明期とも重なり合い、この戦争をきっかけに新聞がさらなる発展を遂げることになった。しかしながら戦況報道の制限やリアルタイムではあっても電信用いた断片的なストレートニュースでは、戦況報道に注目する一般庶民を充足させることはできなかつたため、視覚メディアとしてその補助的な役割を果たしたのが江戸時代から脈々と庶民に親しまれていた錦絵であった。

本論文は、錦絵のジャーナリズム的な側面に焦点をあて、当時の錦絵が、遠い地で繰り広げられていた戦において維新の英雄が非業の死をむかえることになるに至ったという物語をいかに描き、それは政府軍や薩摩軍のイメージ形成にいかなる影響を与えたのかという研究をめざしたが、現時点ではまだまだこの研究テーマの戸口に立って覗き込んでいるだけのようない感じがしている。ようやくその奥にある興味深い様々なテーマが見えているところでもあり、今後も渉猟を重ねてさらなる研究を継続したい。

#### 注

- 1) 「錦絵の始：江戸絵または一枚絵とも称し江戸において木版摺として刊行せる浮世絵のことをいう。元禄時代の代表的な浮世絵師菱川師宣によって始められ、ついで明和二年の頃に至り、清楚秀麗なる美人画をもって名高い鈴木春信が下絵を支那の採色摺にならいて板木師金六というものに板摺をたのみ、それまで紅緑色より外になかった紅絵に、初めて四五度の採色摺を施してから錦絵と呼ばれるようになった」万里閣『話の大事典第三巻』（万里閣、1951年）349頁。
- 2) 朝日新聞社『明治大正史1 言論編』88頁。
- 3) 日本新聞販売協会『新聞販売百年史』（1971）211頁。
- 4) 日本新聞販売協会 前掲書 211頁。
- 5) 岡島新聞舗『大阪の新聞』（岡島新聞舗、1936年）59-60頁。
- 6) 朝日新聞社 前掲書 90頁。ここには成島は京都の大本営に留まり「京洛遊里」のレポートにいそしんだと記載されている。
- 7) 小沢健志『日本の写真史 [幕末の伝播から明治期まで]』（ニッコールクラブ、1986年）86-87

頁。

- 8) 渡辺のリスト（「熊本市立博物館所蔵西南戦争錦絵について」『熊本史学』第49号1997年、35頁）に掲載されている他の絵師たちを列举すると、泰蛾（5点）、貞信（4点）、松山（3点）、銀光、龍洞、永濯、年雪、国政（2点）となっており、その作品がそれぞれ1点ずつ所収されている絵師は、暁斎、清親、房種、年英、甘齋、広重、蕉窓となっているが、当時は同じ絵師が異なる画号を用いていたこともあるので、絵師たちのさらなる検証は今後の課題としたい。熊本市立美術館が当時のすべての作品を所収しているわけではないが、数量的規模が大きいことからここでは参考資料とした。
- 9) 千葉県美術館編『文明開化の錦絵新聞—東京日日新聞、郵便報知新聞全作品』（図書刊行会、2008年）204-207頁。
- 10) 津金澤聡廣「ニューメディアとしての新聞 明治の大阪～20世紀の扉を開いたフロンティア・スピリッツ④」『大阪人』（大阪都市協会、2001年5月号）63頁。
- 11) 森銑三『明治東京逸聞史1』47-48頁。
- 12) 森銑三『明治東京逸聞史1』205頁。

#### 参考文献

- 朝日新聞社編『明治大正史1 言論編』（朝日新聞社、1930年）
- 有山輝雄「西南戦争におけるメディア情報世界の形成・序」日本大学法学部新聞学研究所紀要『ジャーナリズム&メディア』第12号、2019年2月19日、23-34頁
- 有山輝雄「西南戦争におけるメディア情報世界の形成」メディア史研究会第293回月例研究会（2019年3月30日）配布資料
- 有山輝雄「西南戦争におけるメディア情報世界の形成」メディア史研究会『メディア史研究』46（2019年9月）84-107頁
- 有山輝雄「西南戦争におけるメディア情報世界の形成（二）」メディア史研究会『メディア史研究』47（2020年9月）68-94頁
- 伊藤逸平『日本写真発達史』（朝日ソノラマ、1975年）
- 岩切信一郎『明治版画史』（吉川弘文館、2009年）
- 大阪毎日新聞社『大阪毎日新聞社史』（大阪毎日新聞社、1922年）
- 尾崎秀樹、加太こうじ、時野谷勝『錦絵日本の歴史〈四〉西郷隆盛と明治時代』（日本放送出版協会、1982年）
- 小沢健志『日本の写真史 幕末の伝来から明治期まで』（ニッコールクラブ、1986年）
- 岡島新聞舗『大阪の新聞』（岡島新聞舗、1936年）
- 加藤秀俊・前田愛『明治メディア考』（河出書房新社、2008年）
- 小野秀雄『新聞文庫2 内外新聞小史』（信濃毎日新聞社、1949年）
- 小野秀雄『新訂内外新聞史』（日本新聞協会、1979年）
- 小成隆俊『日本欧米 比較情報文化年表（1400年-1970年）』（雄山閣出版、1998年）
- 小西四郎『錦絵 幕末明治の歴史 8 西南戦争』（講談社、1977年）
- 小沢健志『日本の写真史 [幕末の伝播から明治期まで]』（ニッコールクラブ、1986年）
- 小林忠『浮世絵』（山川出版社、2019年）

- 千葉市美術館編『文明開化の錦絵新聞—東京日日新聞、郵便報知新聞全作品』（図書刊行会、2008年）
- 土屋礼子『大阪の錦絵新聞』（三元社、1995年）
- 原秀成「新聞錦絵と錦絵新聞—その出版状況と構造の変化」近代日本研究会 年報『近代日本研究 12 近代日本と情報』（山川出版社、1990年）68-92頁
- 原口泉監修『戦況図解西南戦争』（三栄書房、2018年）
- 樋口弘『幕末明治の浮世絵集成』（味燈書屋、1955年）
- 永田生慈『資料による近代浮世絵事情』（三彩社、1992年）
- 日本新聞販売協会『新聞販売百年史』（日本新聞販売協会、1971年）
- 津金澤聡廣「ニューメディアとしての新聞 明治の大阪～20世紀の扉を開いたフロンティア・スピリッツ④」『大阪人』（大阪都市協会、2001年5月号）62-64頁
- 宮澤達三『錦絵のちから 幕末の時事的錦絵とかわら版』（文生書院、2004年）
- モース, エドワード S. / 石川欣一訳『日本その日その日』（講談社、2019年）= Morse, Edward Sylvester *Japan Day by Day* (1917)
- 森銑三『明治東京逸聞史 1』（平凡社、1982年）
- 山本武利『新聞と民衆』（紀伊國屋書店、1994年）
- 山本文雄『[増補] 日本マス・コミュニケーション史』（東海大学出版会、1996年）
- 吉田暎二『浮世絵入門』（緑園書房、1963年）
- 『浮世絵入門』（画文堂、1968年）
- 渡辺光一「熊本市立博物館所蔵西南戦争錦絵について」『熊本史学』第49号、1977年3月32-36頁
- 渡邊桂子「西南戦争における[戦地派遣記者]—政府軍熊本城連絡以前の時期を対象に」早稲田大学『史観』第176冊（2017年1月）20-36頁

参考資料 関連年表 ( ) 内は実施された月

年度	メディア関連の出来事	その他
1869 (明治2) 年		民間紙の発行を許可 (2) 五稜郭・榎本武揚 (5) 東京・横浜間に電信 (10)
1870 (明治3) 年		神戸・大阪間に電信 (8) 人力車の登場
1871 (明治4) 年		郵便開始 (3) 岩倉使節団出発 (10)
1872 (明治5) 年	【東京日日新聞】創刊 (2) 【郵便報知新聞】創刊 (6)	陸海軍両省設置 (1) 東京・大阪間電信 (4) 長崎・上海間に海底電信線 (6) 学制開始 (8) 東京・横浜間鉄道開業式 (9) 太陽暦へ (12)
1873 (明治6) 年		徴兵令 (1) 征韓論争で西郷辞職 (10) 銀座赤煉瓦街完成 (10) ウィーン万国博覧会参加 (10)
1874 (明治7) 年	錦絵新聞の時代始まる (10) 【朝野新聞】創刊 (9) 【読売新聞】創刊 (11)	佐賀の乱 (1) 台湾出兵 (4) 大阪・神戸間に鉄道開通 (5)
1875 (明治8) 年	【東京曙新聞】創刊 (6)	新聞紙条例及び讒誘律制定 (6) 新出版条例発布 (9)
1876 (明治9) 年		大阪・京都間に鉄道開通 (6) 熊本・神風蓮の乱 (10) 萩・前原一誠の乱 (10)
1877 (明治10) 年	【団々珍聞】創刊 (3)	西南の役 (2~9) 第1回内国勸業博覧会 (8)
1878 (明治11) 年	石板の流行始まる	陸軍参謀本部設置 (12)
1879 (明治12) 年	【朝日新聞】創刊 (1)	大久保利通暗殺 (5) 竹橋暴動 (7)
1880 (明治13) 年		警視庁の設置 (1) 新聞雑誌等を警保局に納本 (2) 第2回内国勸業博覧会 (3)
1881 (明治14) 年	【東洋自由新聞】創刊 (3)	
1882 (明治15) 年	錦絵新聞の時代終わる	銀座・電気灯の試験点火 (6)

出典：樋口弘『幕末明治の浮世絵集成』（味燈書屋，1955年）79-81頁。小成隆俊『日本欧米比較情報文化年表（1400年-1970年）』（雄山閣出版，1998年）362-374頁。